

こゝに帰る

和田重正に学ぶ会

題字 和田重正

ここに帰る

第八十八号

令和八年一月一日発行

目次

『あしかび』二十号

和田 重正

2

欲望の性質

和田先生と私

柳 廣烈

8

まみず

昭和四十九年六・七月合併号

12

白い杖

人間のため

まみず亭・柏樹社十周年記念入道集

「わがいのちをきこ」 パネルメナバー

ヤルンカン書庫の隊長として

西堀栄三郎

14

本物とは何か

藤本 博

31

「書柱」ということ

和田 重正

37

西湘まみず会通信

視野を広げる

和田 重正

42

後記

48

表紙写真

田切越しに望む木曾山脈

長野県上伊那郡

撮影 平澤正義





20

発行人 はじめ塾 和田重正
印刷人 大畑 喜美子
昭和三十五年十一月四日

日曜の話 十月三十日

欲望の性質

前回に述べたように、人間には他の生物にないいろいろな欲望があります。非常に変化に富んだそれらの欲望が互いに助け合い、または抑え合ったりして、千変万化のすがたをあらわします。

仲の良い人たちが集まって楽しい音楽を聴きながら食事をする、食べ物もおいしく、音楽もいっそう快く、交わりも一段と深くなって、それらの欲望は互いに助長し合っていることになりました。ところがテレビの西部劇も見たい、勉強もしなければならぬ、寝るの必要だ。これらは互いに抑え合っ

いる関係です。

おろん人によって、おのおの欲望の配合の割合が違います。ある人は、人から好かれたい欲が強くて物質欲が弱いかと思うと、その反対の人もある。ある人は、前に述べた他の動物と共通な本能的欲望ばかり強くて、人間独特の欲望はまるで弱いかと思うと、その正反対の人もある。

また同じ人でも、時と場合によって欲望の配合の割合は変わります。

しかし、だいたい人は、おのおのその人独特の配合をもっているものです。それがその人の人柄として感じられるわけです。今まで欲張りで不親切で生意気で、みんなから嫌われていた人が、何かのきっかけで急に親切なつましい人になったとか、若いときには真面目でコツコツと仕事に励んでいた人が、中年になって急に酒を飲み、道楽をして、仕事をろくにせず、人を編してお金を儲けるようになったというようなのは、欲望の配合が急に変わったのです。さて、そうしてみると、欲望の配合・調節がきわ

めて大事な問題だということがわかります。

では、どんな配合が理想的なのでしょう。これに對して「これこの通り」とハッキリ示すことは、私にはできません。ただ私は、経験から知ったことをお話しして、みなさんが考えるのに役立つ資料を提供することができるだけです。

前に言ったように、すべての欲望は、生命の目的のために生命の手足として發生し、成長したものです。だとすると、欲望は生命の目的に役立つように働かなければならない。それが欲望の正しいありかただと言わなければなりません。では生命とはどんなもので、どんな目的をもっているかを知らなければ、徹底しないのですが、ここでは一応、形がなく、したがって切れ目（境目）がなく、その本体は「これ」といつてつかまえることはできない、そのくせハタラクはある。そしてそのハタラクは發展・向上の方向に働く性質を持っていて、破滅向下の方向には働こうとしない。つまり生命の目的は自己の發展

にあると言えます。これは大事なことで、このことが認められなければ私の話は全部成り立ちません。

自己の發展というのは、他の人や物と自分との結びつきを作り、その相手から何かしら取り入れて自分の内容をふやすことです。社交、旅行、読書、研究、実験などはみなその目的に適した業です。これを横への發展と言えば、自分の精神を打ち込んだ芸術作品を遺したり、思想を人の心の中に遺したりするのは、子孫を遺すのとは別に、自分自身を時間的に發展させることで、これを縦への發展と言うことができるでしょう。

このように生命は縦横に自分自身を發展させようと不斷の働きをしているのですが、その働きが欲望となつて現われているわけです。そして人間の生命は、他の生物とは比べものにならない、ねばり強い、複雑な生命力を持っていて、縦にも横にも他の生物とはケタ違いの素晴らしい發展を遂げているのです。——この發展はみな欲望の功績です。この面から見たと、人間の欲望は、生命の目的に適った働きを果た

してきたと言えます。

ところが他の面から見ると、ことに個人個人についてよく観察すると、ずいぶん適当でない欲の活動が目につきます。適当でないというのは、生命の発展に奉仕するのではなく、反対に生命の発展を妨げ、あるいは生命を破滅に追い込むような働きのことを言うのです。食欲ばかり重んじて、胃腸病やその他いろんな病気になるって、えらくならない欲や人と楽しく交わりたい欲、あるいは、もっと生きたい欲までも犠牲にしてしまうようなのはその例です。お金持ちになって優越感を楽しみたい人が、むやみに金儲けに熱中してしまうと、せっかく目的通り十億円儲けても、あらゆる人から恨まれ、軽蔑され、自分の妻子に対してさえ警戒心を抱かなければならない破目に陥り、その人の生命全体の発展という点からみたら、何のために金を儲けたのかわけのわからない結果になってしまいます。つまり、生命の発展のための金銭欲が他の重要な欲望の発展を妨げて、結

局、生命全体としてみると大きなマイナスを稼ぎ出したことになります。

こんなバカバカしいことに、なぜなるのでしょうか。

ここで欲望というものの特性を一つ明らかにしておかなければなりません。それは欲望は、本来生命が自己発展のために発した、いわばその手足のような役目をするものですが、不思議なことに、欲望は、一旦欲望として発せられると、その欲望を達するために専心し、意識をも支配してしまつて出発点を顧みることができなくなってしまうという事実です。だから欲望を^{おもむ}発し、それを^{おもむ}赴くままにしておいたら、自分の主君である生命をも侵すようなことも平気でやります。それで人間は困るのです。

その典型的なものが原水爆です。武力というものは、昔は、けものや他の部族の攻撃から自分を守るために必要だった。だんだん後になると、自分の国が他の国から征服されないうために必要になった。いずれにしても、武力というものは、自分の身を守り、ある場合は他を征服して自己を発展させるために必

要だった。そういう目的を持ったものが、ついに自分自身をも滅ぼしてしまうものを作り出してしまったのですから、一体何のための武力なのかわからなくなってしまう。生存欲がどこまでも、どこまでも野放しになって行くと、自己の生存を危くする仕事をしてしまうのです。

つまり欲望そのものは盲目で信用できません。進んで退くことを知りません。操縦装置のないロケットみたいなものです。

そこで、われわれは、自分のいろいろな欲望を、その本来の目的である、生命の発展のためにうまく役立たせるのはどうしたらよいか、というところまで来しました。ロケットに操縦装置をつければよいと簡単に言っても、それでは問題の解決にはなりません。

一、ロケット（各欲望）に操縦装置をつけられるものかどうか。

二、つけたところで、多くの欲望の間の勢力をどう調整したら総体としてよいのかがわからなければ、

どうにも仕様がありません。

八万四千という、生命軍の部下が活躍していると考えましょう。これらの部下がめいめい勝手に活動していたのでは同志討ちをしたり、一兵卒が味方の幹部級の將軍に闇討ちを食わせたりして、まことに能率のわるい戦いをしてしまいます。そんなまづいことをせず全戦線を統一して、欲望軍の総力を發揮して主君生命の發展に奉仕させるためには、聡明な大將がいなければなりません。

そんな立派な大將がどこかにいるのだろうか、と疑うかも知れないが、いるのです。私の中にも、みなさんの中にもいるのです。このことは、昔からあらゆるすぐれた人々がみんな口を揃えて断言し、保証してくれています。

この大將というのが、われわれのいのちの中に常にそなわっている叡智です。これがいつも采配をふるって欲望軍の指揮をしているのですが、われわれの意識に上^{のほ}ってくるのは、欲望軍の前線で、そこは

いつもガヤガヤ、バタバタと実に騒々しくて、大将の命令が聞こえないのです。そのために欲望軍の大小各部隊は勝手なところで勝手な働きをして、本来の使命に反するような事をしてしまうことにもなるのです。

こういう欲望のすがたを見て、われわれはあわてて欲望を生命に対する悪魔的な敵軍かと誤認したり、あるいは阿修羅あしゆらの如くに荒れ狂うのを外からの圧力によって取り鎮めしずめようとして、大へん骨を折ります。

しかし欲望は、本来、生命の手足で、生命の命令には絶対従順ですが、それ以外のものの干渉に対してはなかなか屈服しようとしません。

ですから、欲望を有効に働かせるのには、われわれの意識という欲望軍の最前線にある伝令機関がいづも総大将の命令を正しく受け取ることができるようになければなりません。

それにはどうしたらよいのでしょうか。欲望戦線の騒ぎを一時鎮めさせずれば聞こえます。ではどうし

たら鎮まるか。——もう、みなさんはわかったでしょう。そうです。どうもこうもありません……。この先は口で言うより仕方がないのです。聞きたい人は私に直接聞いて下さい。こうして欲望のざわめきを鎮めて総大将の命令を聞くことになると、だんだんに、ざわめきの中でも聞きとれるようになってきます。

どうか、この本当ほんとうの話はなしを聞いて、「よし、きたッ」と勇氣を出して下さい。

なお、参考までに、付け加えておきます。

いのちとの密着度から考えると、いのちを底辺としてその上に第一段の欲望として、食欲・睡眠欲・性欲・運動欲の四つの欲望があります。これらの欲望はだいたい高等動物はみんな持っています。

更に第二段として、第一段の四つの欲望以外の感覚的欲望があります。これはある種の高等動物は多少持っているらしい。

つぎに三段以上に、金銭欲・物欲、名誉権勢欲・

支配欲、安心立命欲、愛他隣人欲、と六段までの欲望が考えられます。三段以上になると、人間だけしか持つていない欲望です。

更に七段には無欲欲、そして頂上に何という欲とも名づけられない欲というものが考えられるでしょう。しかし、そういう生命から見れば間接的な欲望も、出発点は生命自体にあるし、また本能的欲望の上に芽をふいたものであることを忘れてはならない。

もし欲望に高級低級をつけるならば、生命に近いほど低級で、それから離れているほど高級だと言えるかも知れない。しかし低級だから価値が少ないとか、粗末にしてもよいとかいうのではありません。むしろ、大切といえは基礎ですから、一番大切かも知れません。大事にして乱暴な働き方をしないようにしなければならぬでしょう。

でも、それと同時に低級な欲ばかり大事にして発達させて高級な方をおろそかにしたのでは、それだけ、けだものに近いのであって、人間らしくないことになります。

人間である以上、より多く人間らしい方がいいのですし、やはりそれが人間としての生命の要求なのです。それから、もう一つ知っておかなければならないことは、生命に近い欲の方は、特に意識が取り上げてかまっても、生命の維持に差支えるほど衰えることはありません。むしろ余計なおせっかいをしない方が健全に働くのです。それに反して、高級な欲つまり生命からの距離の遠い欲は、自然に放っておいたのではなかなか発達しません。意識によって開拓して育てていかなければなりません。

こういう事実を知っていると、ある欲と他の欲と衝突してどっちにしようかというとき、なるべく人間らしい欲を取る方が、動物に近い欲に従うよりか、より人間らしい選択の仕方だということがわかります。

(おことわり) この話をはじめてしてみました。が、やはりまだみなさんにわかるほどやさしく話すことができないことがわかりました。それは私にまだ力がないことをあらわしています。二回や

ってみて、どうしても駄目だとわかりましたので、これで打ち切ります。また、五年か十年もたつてもっと私に力ができたら、その時にはもっとわかるように話しましょう。しかし、そのときには、みなさんはもう、この話ぐらいいはわかる年齢になっているでしょうが。

でも、この話が、わかってもらわなくても、何か感じた人があったら遠慮なく、どんなギロンでも吹ツかけて下さい。もしそんな人が一人でもあったら、私はどんなにうれしいか知れません。

柳鷹烈君からの手紙

柳鷹烈君は朝鮮（韓国）京城の京畿中学校で理科の先生をしています。先頃副校長になったそうです。が、家では三男二女のよきお父さんです。

次の文は「あしかび」に載せるために送って来たものです。読んでみると、私は冷汗をびっしょりかいてしまいました。それはそれとして、柳君の私に対する敬愛の気持が、ありのままにあらわれていますし、それがまた私の柳君に対する気持そのものであることを深く感じますので、きまりのわるさをこらえて原文をありのまま載せます。

和田先生と私

柳 鷹烈

私が中学校五年生の時だったと思いますが、その時分、私はこんなことを考えていました。

「ほんとうに立派な人に会ってみたい。過去の人物では孔子様、お釈迦様のような素晴らしい方が居られたのですが、そんなお方で現在生存している人物に会いたい。言行録など読んでみても歯がゆいところが多い。もっと具体的なことがききたい。どんなに悩まれたか、そしてどんなに解決なされたかを。そ

してそんな方はものすごく明るい智恵と完成された人格をもっていられるお方であるに違いない。そんなお方に会って、その指図に従って自分も修行したいものだ」

こんな願望を抱いていた時にみつけたお方が和田先生でした。

その時和田先生は修身と公民科目を担当していられました。先生の講義は本を読ませて説明するような窮屈な講義ではありませんでした。すべて先生自身のお話でした。大抵の先生は誰々様がこんなことを言った。何々の本にこんなことが書いてあるといったようなお話でしたが、先生は御自分で体験なさったこと以外にお話なされたことはありません。先生のお話には自信があり、非常なおもひを持っていた。私はひそかにこんなことを考えました。

「確かに和田先生は眞實を把握なさったお方だ。

その奥の拠よつて立つところを究めよう」と。

ある時こんな話をなされた。誰でも自分で造った因は消すことは出来ない。必ず果を受けるものだ。

私は先生に質問しました。それでは悔い改めるということは意義のないことではありませんか、と。

先生のお答えはこうでした。「懺悔すれば因果律の埒らち外に立つのだ」と。その時は無論その意義は分からなかったのですが、先生のお言葉を信じました。自分もそれが分かるまで頑張ってみようと決心しました。今になってその意義がどうやら分かったのです。

その時分、私は西荻窪の先生のお宅を時々お尋ねしました。先生のお話を熱心に聴きました。夜の二時まで聴いたことが何度もあります。夜の道を希望に燃えて、或いは思いに沈んで徒歩で下宿に帰りました。その後私はすべてを先生から戴きました。先生を通して絶対者を拝むことを知りました。或る時先生はこんなことも話された。「眼に見える人間同志が信ぜられないなら、目に見えない神さまを信ずることなど出来るものではない」と。

私は和田先生を絶対的に信じていましたから絶対者を信ずることができました。教育の力はこんなに

偉大なものです。

私は、先生の前では何物も隠すことが出来ませんでした。すべてを熟知していられたからです。自分でもそれを努力しました。そして誠心誠意を尽くそうとしました。

東京の西荻窪にお宅があった時です。八幡神社のある谷間に小川が流れていました。その小川の辺り（ほと）で先生と畑作りをしたのですが、はじめてくわを使うときは大分骨が折れました。腰は痛い、腕も痛い、ほんとうに堪えられない程です。そのうちにだんだん工夫しました。そして遂にくわを使う要領を会得しました。今までは腕の力で使っていたのを全身の重力をもって使う要領が分かったのです。そうなるに楽なものです。一日中くわで畑を耕したって何でもないんです。おしゃべりをしながら畑を耕すんですよ。

でも一人でやっているのと疲れが来るんですね。そんな時にひょっこり先生がこられて世間話でもそばでなされると、重かったくわが急に軽くなるんです。

そのうちに先生が去られると、くわはまた重くなるのです。不思議だなと思って先生にそのことをお話ししたら、先生は会心の笑み（え）と共に「こんなに言われた」「それは一緒にくわを使っていたんだから軽くなるはずだ」

と。精神力、誠心誠意はこんなに通ずるものですね。

その後、私は『発心総願』を読みました。それはこんなすじ道です。法蔵菩薩が世自在王仏の目前に現われて四十八の誓願を立てるのです。その誓願を憶えてはおりませんが、そのあらましは有情非情、ありとしあらゆるものを成仏させなければ自分は仏にならない、というとてもない宏大な誓願です。ところが世自在王仏がその誓願を受け合ったのです。なんとすばらしいことでしょう。「君の願いはかなうぞ」といつてやったのですよ。誰でもこうなると勇氣百倍するでしょう。皆さんが自分の願っている学校に入学したいと願いを起こして木か鋳物で造った仏様のみ前でその願いを立てて、その仏様がおもむろに「君の願いはかなうぞ」と言ったとしたらどう

でしょう。その願いを果たすために勇躍邁進するでしよう。それが木か鋳物で造った仏様でなくて、生きて動いている仏様がおっしゃるならもつと確実でしょう。そして法蔵菩薩は無限劫ごうを修行してありとしあらゆるものが成仏しているのをみて、自分も最後に仏になったのです。その仏が阿弥陀様です。そしてアミダ様は迷っている衆生しゅじやうを救うために觀世音菩薩の位に下ったというすじみちです。

私はこの総願を読んでこれは自分のことだな、と思いました。なるほど先生は世自在王仏だ、そして自分は法蔵菩薩だと。和田先生と私はこんな関係なんです。

お釈迦様がこんなことをおっしゃったのです。

「人身は甚だ得難く仏の世また遇い難し。

見て恭い得て大いに喜べば

即ち吾が良き親友なり」と。

〈行事と案内〉

○ 高野毅先生を囲む座談会

「盤珪不生禪と森田生活道」

十一月十三日 はじめ塾有法堂にて

・高校生、大学生諸君に、ぜひ聞いてもらいたい
・ノイローゼ気味の人は何をおいても聴聞せよ

○ 部屋の出入りのきまりは確実に実行しよう。

○ 個人の室に勝手に入ってはいけない。



まみず

昭和四十九年 六・七月合併号 その2

人間のため

白い杖 41

人間のための宗教、人間のための教育、人間のための医学、人間のための技術、などという声が大きくなってきた。そしてようやく、「産業を人間に合わせて」という記事が新聞に出るようになった。宗教や教育までも人間を忘れてあらぬ方へ迷い込んで猛威を振るつたため人間が息苦しくなったのだ。一切の文明も文化もともと人間のためのものだったことに人々が気づきはじめたのだろう。結構なことだ。しかしその人間とは？ 実はこれが問題なのだ。

『まみず』百号・柏樹社十周年記念大講演集

1 鼎談 「わがいのちを生きる」

パネルメンバー

西堀栄三郎

藤本 博

和田 重正

2 講演 「山岡鉄舟」

大森曹玄老師

大森老師の講演は、都合により次号
八十九号に掲載させていただきます。

まえがき 本稿は、五百人余

の参加者を得て誠に盛会であった
右記講演会のお話を、当編集部の
責任でまとめたものです。演者の
先生方を紹介します。

第一部の最初にお話いただいた
西堀先生は、現在、日本規格協会
の顧問をなさっていらっしゃいま
すが、これまでのご経歴は、皆さ

んご承知のように、日本の大学山

岳部をはじめ作られた方ですし、
第一次マナスル登頂にも参加され、
最初の南極越冬隊の隊長をされた
方でもあります。常に日本ではじ
めての仕事に取り組んでこられた
方です。

次の藤本先生は、神奈川県青年
の家の生みの親、育ての親であり、

その情熱的なお人柄は、若い人々
の敬愛の的である方です。

和田同人は略しまして、

第二部の大森老師は、本当に「底
がぬけた」方というのはこういう
方をいうのでしょうか、禅・剣・
書の真義をきわめた方です。現在、
花園大学の教授であり、鉄舟ゆか
りの高歩院のご住職でもあります。



ヤルンカン 登壇の 隊長として

西堀栄三郎

(日本規格協会顧問)

ただいま御紹介にあずかりました西堀です。今日は、柏樹社の十周年、また「まみず」百号の出収記念の会にお招きいただき、大変光栄に存じますと同時に、柏樹社におかれましては一層ご繁栄になりますことを願ってお祝い申し上げます。

早速でございますが、どうもこの「わがいのちを生きる」という表題で、しかも皆様方のようなご

立派な方々の前で、私が何も申すことはございませんし、また申し上げましても、全部恥をさらすようなことになってしまうおそれもございます。また私のような生き方は他の方々におすすめるような、そういうものではなくて、ずいぶんスジ違いなものでございますので、お役に立つとも思えないのでございます。

むしろ私は、自分がこのような生き方をしてきたということを申し上げて、藤本先生や和田先生からご批判をいただきたいと思う次第でございます。

前向きに生きる

私は京都の町中で生まれた人間

でございます。小さい時から体が必ずしもよくはございませんで、小学校で並んでおりますと、尻から二人目でございました。しかしまだもう一人私より背の低いやつがいると思って、むしろ心なぐさめておりました。また、私の兄が――私よりずっと年上でございますが、それが、

「何もお前、人間は体だけとちがうぞ」

と言ってくれまして、そんなようなことから少しずつ自分で何とか工夫して体が弱いことを補うつもりでやってまいりました。

そのうちに、私のうちはちよっとした仏教信者なものでございますので、愛宕山の頂上、これは京都の西の方にある山でございます

が、そこへ参って毎月お礼をもらうことになっておりました。私の所からも番頭さんが毎月お礼をもらいにいきます。

ある日——私が小学生の時です。「私も連れて行ってくれ」と言いましたところ、

「あんたみたいな、じゃまになるもん、かなわん、かなわん」と言っで連れていってくれないでございしますが、むりやりついて行きました。

やはりからだも弱うございまして、愛宕山というふうな低い山でしたけれど、登るのにはずいぶん苦労いたしました。帰ってまいりますともうクタクタになって、もう二度と山には行かないだろうと皆が思っていたようですが、

私はまたしても、

「おいボンスケも連れていってくれ」と言い出す。しかし、何べん山へ行きましても、いっこうにどうもからだの方がうまくいうときいてくれません。ちよつとも上達したようにも思いませんでした。

そのうち番頭さんが変わりました、新しい番頭さんが行くことになりました。そうなりましたら、とたんに話がかわってまいりました。私がむしろ愛宕山のことについてはよく知ってるわけでございますから、今度は私が先達になつて行くことになったわけです。あすこを曲がればあすこに茶屋があるぞ。あっちの方がこっちより安いぞといったことまでよく知っておりますし、頂上へ行きましても、

札買う時にはこうして買うのだ、ああして買うのだ、ということをしめますと、もう番頭さんも「そうですね、そうですね」と言つてやつてくれるものですから、私はもう得意満面でございました。

そして帰つてまいりましたら、いつもと違つて全然疲れておりません。もうシャンシャンしているわけです。はてなこんなはずがないと自分でさえ思ふぐらい変わつております。やっぱり人間というものには自分で今までやっていたより、何かしら前向きに進歩すると調子に乗つて何でもできるようになる、そうなる自分というものがある、何かすべてよくなるもんだなあということが感じられました。

実は正直に申しますと、その調

子に乗った勢いで、近い山からあつちの山、こっちの山へと登ったりすることが始まったので、私の山登りのきっかけはそういうことであつたんだと思います。

その時以来、私は心のもち方というものがいかに大切なものであるかということを感じましたし、それからというものは、すべて物を事を能動的に考えよう、受身でなく、能動的に考えようと思い始めました。

船を自分でゆすぶる

私は、からだも十分でなかったものでしたから、船に乗りますと、すぐ酔ってしまいます。たまたま京都から大島へやってきても、も

うすぐ船に乗るとゲロゲロやっってしまう。他の友人はシャンシヤンしているのに、私だけなんてこんなに酔わなければならんのか、と思うぐらいでございました。そのとき友人が、

「お前何や、船に負けとるのや」と言いますものですから、それからというものは、船を自分でゆすぶっているんだと思うように心掛けたんです。なかなかこれはそう簡単ではございませんでしたけれども、だんだんそういうことに慣れてまいりましたら、今度はもう途端に船に酔わなくなりました。

戦前アメリカに留学を命ぜられました時、やはり船に乗って行きましたが、皆さん全部ダウンしておられましても、私だけはちゃん

としておりました。

また南極にまいります時も、この船はよくゆれるのでございますが、もう船長以下全員ダウンしたことがございました。私はあの大きな宗谷を一生懸命にゆすぶっておるのでございますから、もうハラが減ってハラが減ってしょうがない。大きなナベの底に冷や飯がございましたので、そいつをドンブリバチに入れて、そしてウナギのカバヤキのカンヅメをあけて食うたことがございました。その日、メシを食ったのは私だけでございました。晩になりますと、もうケチョンケチョンにからだが疲れておりますもんですから、もう横になつたらグースカ寝てしまった。四十五度揺れた時など、どうとう

上から落っこちてしまったこともございましたけども、それぐらいよく寝てるわけでございます。

まあ、万事そういうふうにも動的にやるのがいいのだということ、それから何につけて考えるというふうになりました。私も中学校の終わりになりますと、人生いろんなことを考える時期がございましたが、その時に、一人人間、何のために生まれてきたんだろうかなあと思ひまして、その時「人生、人間は経験を積むために生まれてきたのだ」という、きわめて幼稚な人生観ではございますけれども、この人生観が、実際正直に申しますと、今日までまだ生き生きと続いております。

南極とヒマラヤ

私は昨年のも二月から六月までヒマラヤに行つてまいりましたが、ヒマラヤの山の中でも、世界で五番目に高いヤルンカンという山に登つてまいりました。もちろん私が登つたわけではございませんが、登る隊の隊長になつて行くことになりました。三ヵ月半というものはずうっとテント生活をするのですが、このテント生活というものは、南極の生活と比べますとはるかにきついのです。南極はまあご承知のとおり、寒いことは寒いのですけれど、ただ寒いだけなんです。ところがヒマラヤの場合は、それよりまた他の条件がともなつ

ております。

南極の場合と同じように、ヒマラヤのテント生活では、晩は南極並みの寒さになり、昼は熱帯でございますから熱帯並みの暑さになるわけです。それだけ温度変化が非常に激しいんです。南極の隊営ですと、ちゃんとプレハブの立派な建物でございます。坪当たり天皇陛下のお家より高いというふうな、そういう立派な家の中に住んでおり、温度もちゃんと十五度に調節しておりますから、外がどれほど暑かろうが寒かろうが、部屋の中は気温十五度でピシヤツとなつています。ところがテント生活の場合は、あのうすっぱらのテント一枚でございますから、外の気温の変化がもろに伝わります。

そして寝るベッドはといいますと、私がちやうどそこへ到達したときには雪の上でございまして、そこへ柴しばを敷いて、その上にテントを張って寝てるというわけでありますから、したがって、文字通り臥薪がしん、柴の上に寝てるので、決して寝心地はよくありません。

しかも食べ物とは申しますと、まあ南極は船やいろんなもので運んでいたからです、立派なごちそうが毎日出ます。それは冷凍品でございすけれども、ともかく大変なごちそうをちやうだいしているわけです。ある隊員のごときは、

「こんなぜいたくしていたら、東京へ帰ってからは安月給ではやっていかれんぞ」

なんて言っておりましたが、そしてたら誰かが、

「おい、お帰れると思つてるのか」ということで話が終わったことまございす。

またヒマラヤの場合でございまして、全部人間の肩で運ばなければなりません。一人の運ぶ目方は三十キロを超えてはならないというネパールの法律がございすために、我々の荷物、食糧品から登山の道具から一切合切を巡びますと四百五十人の人夫を必要といたします。しかもその四百五十人の人夫が毎日千メートルぐらいのところを下りては上がり——まあ逆みたいな感じがするけども、だいたい泊まる時は全部尾根の上で泊まっております。ネパールはご承

知の通り、下の方へ行きますと非常に疫病などがありまして大変暑いもんですから、それでみんな尾根の高いところで生活をしてるわけです——それで、谷へ下りて、つり橋を渡って、それからまた千メートルのところを上がってくるというわけで、あくる日はまたそこを下りて、また橋を渡って……という式でやります。そして二十日間かかってようやくそこまでたどりついたのでございす。したがってその間というものはもう、荷物は十分運べません。

例えば書物なんか重いですから、専門の書物はやむをえませんが、他の書物は各自一冊ずつと決めたんです。私も一冊しかもてないわけで、何の本を持ってい

ってやろうかなと思って、はじめ考えたんですけども、まあせいぜい読んでいたらねむくなるような睡眠剤をも兼ねるような、そういう本がよからう。一冊持っていたら、もういくら読んでも読み切れないような本がよからうと思っただんですが、たまたまホテルに泊まっておりましたら『ティーチング・オブ・ブダー』という本が置いてありました。ハハハ、これを一つ持っていったらやろうと思ひまして、秘書に言って買いにやりまして、その『ティーチング・オブ・ブダー』という本を持ってきました。

これはよかったです。眠れなくなりまして睡眠剤にもなりますし、なかなか読み切れるもんじやござい

ません。いっこうにわけのわからんことが書いてございます。英語で書いてある仏教書ですが、おどろいたことに私はそれを三べんも読みました。いかにひまであつたかがお分かりになるだろうと思ひんでございます。

まあ話が横へ飛びましたが、そんなような生活でございますので、食へものもしたがつてきわめて少ない。まあヒツジを主として食へておるんでございますが、これは、肉が足をつけて歩いとるようなもので、まあ勝手に運んできよるんですから非常に都合がよろしい。けれども、その千メートル上がつたり下りたり、二十日間かかってようやく来たわけでありまして、その間ろくすっぽエサも余り食わ

しておりませんので、もう骨と皮とになつてゐるやつなんです。そいつをズバツとやって食へるんでございますけれども、私のようないろいろ入れ歯の人間では、とても硬くて、それは食われたもんではないですよ。それでしようがありませんから、どこかやわらかいところがないかしらと思つてさがしましたら、脳ミソだとか、キモだとかというのがあつたわけですね。これは隊長特別料理といつて、ちゃんと別にしてございます。隊長特別料理というといかにもいいようでございますけれども、朝も昼も晩もそればかり食わされるのは余り感心したものでないんでございます。

その上にまた酸素が少なくなり

ます。まあ内地におります時には酸素みたいなもん、どうでもいいと思っておりますけれども、さて空気が少なくなってきましたと空気の有難味というのはよくわかります。

何でも物事は考えよう

まあそんなような生活をしておったのでございますが、それは南極からみたらはるかにきつい生活でございます。しかも私の年齢も南極の時からくらべますと、もう大分たっておりますし、そんなようなどころで実際、ふつうならまあ楽しじゃあございませぬ。けれども先程申しましたように、物事は何でも考えようだ、ということでは

私は進んでおりますし、どんなにかつらいことだと人が見るようなことでも、これはいい経験だなあと思つて何でもやりますものですから、むしろ楽しくてしょうがない。

しかし、あれがもしやらされていると思つていたらもうあんなもん一日もかなわないです。自分でやっているとせばこそ、うまいこと案に行けるんです。会社に勤めている若い方々にしても、同じやらなければならんのなら、自分でやっているとと思えばよさそうなんです、まあそんなことを思つたらお給料上げてもらえないからというんでしょうか。われわれの方は別にお給料とは関係ございませぬ。したがってまあ、何事も自分でやりたいからやっています

るのだという気持でございます。

しかしながらやっぱり生理的には、ずいぶん無理していたとみえます、お風呂も三ヶ月半一度も入ったことがないわけでございますが、からだを拭くぐらいのことはやるんです。ハダカになってみて、何とまあようやせたなあ、実はビックリギョウテンいたしました。帰ってから目方を量りました。たら十キロ減つておりました。ああ、これはさすがにしくなったなあ、と、実際そうなんです、岩登りなんかいたしまして岩の間を歩きます時も、まるで仙人がやっているようにヒラリヒラリと本当に身が軽くて、おまけに先程申したような本でも理解できるようになつたということは、頭がものすごく

さえてきてるんですね。内地にいるときに、いかにいらんことをしていたのかと思うくらいでございました。

必死ということ

まあ、つまらんことを申しましたけれど、そこは植林限界（森林限界か？）なんですが、そこからベースキャンプまででかけますのは、ずいぶん道の悪いところ——道ではありません、氷河の上でございます。大きな石がゴロゴロしておりまして、その石の横の氷河は氷の壁でございまして、その下に池が必ずできております。そこで足一つすべらしたり、岩からころんだら、そのガケを落ちて、

池の中にジャボンとはまるわけですね。もちろん池の上には氷が張っておりまして、そんな氷ぐらいすぐに割れてしまふ。まあそんなところを四日間歩いたんですけれど、今申したようにからだが軽くなっておりますのでヒラヒラリと行けるんです。しかし、残念なことに貯蓄がないもんですから、すぐエンストをおこしてしまいます。もう歩けないようになりました。しょうがありませんからハチミツを溶かしてある水を飲んでガソリンがわりに入れますと、まあちよっとエンジンが動きますけれど、またしてもエンストをおこしてしまいます。これはなかなか進みません。最後の四日目ぐらいになりましたら、もう全然動か

ないようになりました。

その時初めて私は「必死」というコトバがどういうことを意味しているのかが、ようやくわかったんです。必死という言葉は本当に苦しいもんですね。もっともあれは、必ず死ななければいけないものなんですけれども、いよいよ歩けんようになると、私自身を叱りとばすんです。「コラ！まだお前は生きているじゃないか！」生きていたら歩かないといかんですね。必死なんですから必ず死なないといかんけど、まだ死んでないから、まだ歩かなければしょうがない。それでモタモタ歩きますと、またへばってしまふ。とうとうベースキャンプのすぐそばからお医者を迎えに来てくれて、私に

注射を二本ブスブスとうって
くれ、まあようやくベースキャン
プにたどりついたんです。

隊長の任務——激励ということ

そこは五千三百メートルの高い
所でございます。しかし私たちの
登ろうという山はヤルンカンとい
う山で、皆様は多分ご存知ないだ
ろうと思います。それはご存知な
いのがあたり前で、その山の名前
をつけたのはわれわれでございま
すから。しかし、その山は八千五
百メートルと私たちの測量によっ
てわかりました。世界で五番目に
高い山でございます。そんな高い
山がまだ登られずに残っていたと
いうことはふしぎなぐらいでござ

います。あのマナスルは八千百四
十メートルございますので、まだ
四百数十メートル高いのでござい
ます。こんな山に登るということ
は容易なことではございません。
私の登りました五千三百メートル
の所からまだ三千二百メートルも
あるわけです。つまり、そこから
富士山ぐらいの高さの所まで登ら
なければならんわけです。

もうその辺になると空気がすっ
かり弱くなっており、非常な困難
です。もう氷がガガとしておりま
して、その間に道を探さざるをえ、
大変な苦勞でございますが、幸い
文明の利器が利用できます。非常
に強力な望遠鏡を備えつけまして、
それで道をずっと探すわけです。
そして無線機械を持っております

から、トランシーバーでもって、
右行け、左行けということを指図
することになっておるわけです。
ここに工場長に該当するような現
地の一人の責任者、登攀隊長とうはんと
いうのがおります。これにいろい
ろ指図したり激励したりするため
に行ったわけですね。

大体、激励ということが問題な
んです。実は、この山を登る計画
がありましたのは、その当時から
十年前でございす。当時、中心
人物であった若い人たちというも
のは血氣盛んな、実に優秀である
と呼ばれた人たちであつたんです
けれども……、十年たちますと、
まあ十年間ヤルンカン登山の許可
が下りなかったわけですから、も
うその人たちも大変かわりますね。

当時独身の人も結婚いたします。

そうすると子どもが生まれる。十年たてば子どもは小学校へ行くようになってるわけです。小学校へ行く子どものおトッチャンたちです。それから、今さら私が行ってですね。

「あんたたち気をつけないで、危ないで、危ないで」てなバカなことを言う必要は毛頭ありませんね。むしろその人たちのような年になりますと、やっぱり物事におっくうになったり、まあヘッピリゴシになる心配があるので、むしろ私としては激励するのが任務だと思っておりました。しかし、なかなか激励というものはむずかしいことでして、今度は「ガンバレガンバレ」と言って、野球の応援団が太鼓たたいているような具

合にはちょっといかんわけです。

で、一体どうするのが一番いいんだろうかということを目頃考えておりました。

隊長になった羽目

—— 非常識な決断

少し話はさかのぼりますけれども、大体私が隊長になって行くということそれ自身、まあひょんなことからだったんです。それは私がちょうど南米の旅から帰ってきて、羽田に到着いたしましたところ、若い人がやってきて、

「あの、ヤルンカンの許可証が下りそうでございます」

「そうか、そりゃよかったなあ」と、その時まるで他人事みたいに

私は言っていたんです。ところが、その若い人が私のうちへ来て、

「あの許可証を一年先にのばしてもらうように、もう一ぺんネパールの政府に交渉していただかせませんか。西堀さんはネパール政府とは交流が深くお願も広いので、ぜひお願いします」

「何を言うか、バカヤロウ！ お前がわしについてネパールの皇太子の結婚式についてきたんじゃないか、あの時にお前が言ってるのを聞いていたら、もう準備は全部整っております。許可さえおりましたらその日から出られますから、早く許可を下さい、そればかり言っていたじゃないか。それが今、準備ができませんから、一年のばして下さいとは、何を言うか、バ

カモン！」

と言いましたら、

「どう考えても今から勘定しますと、十二月の終わりに荷物を出さなきゃなりません、もう間に合いません」

それで私は、

「さっきから聞いてると、お前は常識的に考えたら不可能じゃ、不可能じゃとばかり言ってるじゃないか。不可能を可能にする方法というもんをお前知らんらしいな」

「はあ知りません」

「それじゃ教えてやる。非常識にやれ、非常識に。常識的にやれんというなら非常識にやったらいいんだ」

とこう言いましたら、分かったのか分からんのか、京都へ飛んで帰

ってゆきました。それからしばらくたったら今西錦司君というのが私のところへ電話をかけてきました。

これは岐阜大学の学長をついこの間までしておりました山の先輩というかまあ同輩でございますが、サルの研究家として有名な男でございます。こいつが電話をかけてきました。

「西堀君、すまんけど今度は一つ、このヤルンカン登山の遠征隊の隊長になって、どうしても行ってもらわんと困るんだがなあ」とこう言っんです。

「そんなムチャ言ったってしょうがない。突然そんなこと言うてきたって、ダメだ」

と私が言いましたら、
「君は若い奴に、不可能を可能に

するには非常識にやれ”ちゅうたんとちがうのか。君、非常識にやったらどうや」

とこう言います。

弱ったなあ……。常識的というのはどんなことかしらんと考えてみますと、常識というのは、今晚一晩よく考えてから決めるとか、あるいは女房によく相談してから決める、というようなことらしいんで、非常識というのはそれをやることだな、と私は思いました。それですぐに受話器持ったままで「そんならもう行くわ！」

正直に言うと、当時このヤルンカンという山がどんな山なのか余りよく知らなかったのでありますが、ともかく、石橋をたたいたら渡れない”ということは自分から

も言ってるぐらいでございますから、「ほんなら行くわ!」という結果となり、電話切りましたあと、女房に、

「おい、行くことにしたで」と申しました。

「あなたは、いつでもそれですなあ」とこういうことでございますが、まあ正直に言って、もし女房に相談してから決めたとしたら、

「そんな年がいもない。おやめなさいよ」

と、さんざん言われるに決まっております。遂に、「それならやめとか」ということになる可能性もあつたんですが、もう決めてしまいましたもんですから女房として、もどうにもなりません。

「あなたはいつもそれですなあ、

一ぺんお決めになったらもうあとへ引かれないのやから、もう行つてらっしゃい。そのかわりまあ氣をつけてね」ぐらいのことで、登山許可証がもらえたわけでございます。

そんなようなことで、いよいよ私が非常識にやらなければならんことになってきました。まだ金が一文もありませんし、それからまあいっぱい荷物を集めて、これも非常識にやりましたおかげで十二月の末日にはピシャリと整いました。

壮行の辞——聯隊旗と守り神

さて、いよいよ出発の前になりましたら、ご承知の桑原武夫君と

いうのがおりますが、これは私の山の後輩にあたるわけでございますが、この男が壮行会の時にあいさつをしてくれました。

「今度、西堀君に隊長になつてもらうことを相談したところ、彼は快く承諾してくれた。(本当は余り快くないんですけれど) しかしなあ、あいつも七十歳の高齢やからなあ、余り体力的には何もできんから、若い人に大変迷惑をかけるに決まってるの。足手まといになつて困るに決まってるんだけどな、まあ言うてみればあれは聯隊旗みたいなもんやなあ」

まあ若い方にはわかりにくいかもしれませんが、昔はあの聯隊旗というのが大変大事にされたことがございました。確かに唯

物論的に考えますればあんな聯隊旗というような、ボロボロの、捨てても価値のないようなものを戦場に持って行ってもクソの役にも立たんのだけれども、まあそこに何だかしらん曰く言い難き味があるというか、価値があるということでございましょうと思います。とうとうこの西堀みたいな立派な人間をハタにたとえるとは何事じやと思っただんですが、まあガマンしておりました。

それから今度は、今西錦司という先程のヤツがやおら立って、今度は壮行の辞を述べてくれました。「西堀と俺とは、中学時代からずうっと一しょに山へ登ってるのだけれどなあ、あいつのその山の登り方というのはムチャクチャでもっ

て、ヤンチャ坊主で、冒険好きで何をしているかわがらんくらい横着な山登りをしているんだけれども、しかし、あいつは運のええ男でなあ、今だかつて遭難したこともないし、そして登るうと思つた山は必ず登ってる、あいつは運のええ男や、したがってあいつと一緒に山へ行っていたら、もう安心して登れる。だからまあ言ってみればお守りみたいなもんやなあ。諸君に、この西堀というお守りを持たしてやるからな、まあ十分活用せよ。」

なるほど私もたしかに運のいい男でございますが、しかしその運は、天から降ってきたり地から湧いてきたりするようなものではなく、自分自身、その運をつかむた

めの相当の努力を積み重ねたゆえのもののように思います。

日本一慎重な男

ある時、国会関係でもつてある代議士の方が、

「西堀というあのヤンチャ坊主の冒険好きの人間を、一番慎重を要する原子力の方などへ連れてきたヤツは一体誰じゃ！」とどなりつけておられたことがありました。もう亡くなりましたが、石川一郎さんというのが私たちの上役でございましたが、この方がやおらお立ちになりました「私でございませう」と。まあ私はそこにおられますでしたからその通りかどうかは存じませんが、

「西堀という人は大変慎重な男で、

慎重さでは日本一の男です。山の登り方をみても、いろんなことのやり方をみても皆さうです。だからこそ南極に彼を行かせたのでございませう。そしてその任務を無事終えて帰ってまいりました。彼はわが国で最も慎重憲男でございませう。したがってその慎重な男を最も慎重を必要とする原予力の方へさし向けたのは適切な措置であつたと思ふのであります。ただ彼の慎重ということばの中には、『だからやりません』ということばがないだけのことです」

と、それで代議士の方は黙ってしまわれたという話がございました。

確かに私も山登りいたしますについても自分では非常に慎重にや

っております。

隊長は責任を、

隊員は能力をフルに發揮

で、二人の挨拶の後でいよいよ私がいさつをしなければならぬいことになったわけですが、そこで一体私は何のために登るのかということについて話しました。激励のためです。激励というものに、一番大事な方向として、どんな効果的な方法があるかと日頃考えておりました。

「ともかく私はこのたび隊長に選ばれました。選ばれました以上は隊長らしくやらしていただきます。つきましては、いかなる事件がおこりましても、私が全責任を負い

ます」

と申し上げました。同時に隊員の方を向きまして。

「諸君よ、私が全責任をとるから、あなた方は失敗するなどという風なことはいさきかも考えないで、ひたすら自らの能力をフルに發揮するにはどうしたらいいかということ、一生懸命になつて考えてやつて下されや。失敗しても責任は私がとつてあげますから」

と申し上げたんでございますが、これが私として精一杯の激励であつたと存じています。

隊長の玉音放送

さて、ヤルンカン登頂をめざし、ベースキャンプにはその隊員の人

たちが全部集まっております。

私は日頃無線でもって指令を出しておるんですが、不幸にして私のほうの無線の機械が故障をおこしてしまいましたために受信ができない。片一方からだけ送信ができるという事態が起りました。私の方から言った声はきこえた。それで皆が玉音放送と言ってました。その玉音放送において、いつも申し上げておるんですが、

「私たちの隊の共同の目的というものは何であるか、皆で、この共同目的というものを果たそうじゃないか。決して隊長の命令でもってどうするこうするということや、人が人を使うような態度で物事をやるんじゃないんだぞ。私たちの共同の目的というのは誰か一人が

頂上へ登れば、それで全員が登ったと同じだ……」

これはあたりまえのように皆様方思われますけれども、外国ではそうは言ってないですね。誰かが一人頂上へ登りましてもあくる日もしい天気だったら、それなら俺も登るわ、またその翌日いい天気なら、わしも登る、俺も、俺もと皆登ってるんですね……。これは個人主義の反映でございます。私たちの場合は一体となってチームワークでやっているんでありますから、頂上へ行く人はわれわれの隊員の代表として行くと、その人が頂上へ登れば全員登ったのも同じ。この七十歳の老人も登ったことになりましたから、はなはだ都合がよろしい。

そういうふうに日頃から言ってるわけです。それはまたひいて考えますと、隊の中では仕事の役割をそれぞれ皆持つてやってくれてはおりますけれども、その仕事に貴い賤しいということがないということ。ずっと食事のことばかりやってくれている隊員もおりますけれど、それを他の人が「こらメシたき」なんてことをもし言うものなら、これはもうホッペタをひっぱたくようなムードです。また本人も、「俺が縁の下の力持ちでやってるからできるのになあ」と、そんなことを言っても、これまたピシッとひっぱたくぐらいのムードがないといかん。みんなやっている仕事は全部貴いんだ。だから頂上へ行くやつは英雄でもな

んでもない。" あいつは必死にな
って行ってるのだから、あれは必
ず死ななければならぬのだから、

かわいそうなやつだ" とみんなが
同情こそすれ、また感謝こそすれ、

そんな人にいばらしたり、また他
の人がそういうふうに見えるとい
うことはとんでもない間違いです。

まあ時間がいまませんから省
略いたしますが、結局幸いにして
頂上に二人の隊員を立てることが
できました。これはヒマラヤ登山
の歴史の中で減多にないことでご
ざいます。たいがいは何べんも何
べんもしくじって、そしてようや
く頂上に達するんですが。ヒマ
ラヤのマナスルの場合でも四
回目でございますから、われわれ
の場合は、いきなりやっていきな

り成功したわけで、実に輝かしい
歴史だったと、まあ自分で自慢さ
せていただきます。

隊員の死

しかしながら帰りに隊員の一人
が死にました。これは酸素不足の
ためでした。もうあと五十メー
トルまで降りてきたら酸素がちゃ
んとおいてあるデコがございます
んですが、そこへとうとう行き着
けないで亡くなったわけでありま
す。この酸素がなくなりますと、
まず最初に頭がボケてまいります。
日頃から酸素の足らん方もいらっ
しゃるかもしれませんが、ともか
く目が見えんようになってきます。
そのうち夢遊病のようになり、そ

の結果として、判断を誤りますか
ら、転落するわけです。

もう一人危うく命をおとしそう
になった隊員がおりました。その
男は、あと二十メートルそばまで
行ったら酸素があるというところ
で、下りなきやならんのに上へ上
がっていった。その時、無線の機
械が故障をおこしておりましたん
で、下から

「おい下りるんだぞ、上へ行く
んどこがうぞ、」

と言おうとしても、どうしても通
じないんですね。とうとう上へ上
へ上がっていったままで、そこで
また……、幸い救援隊が行くまで
じっとしていてくれましたもんで
すから助かりました。

責任を負うとはどういうことか

このような大事件が起こりました。私も隊長として大変な事件が起こったものでありますから責任を負わなければならない。

さて、そうなった時に、一体責任を負うということはどういうことなんでしょう。日頃、簡単に「責任を負います、私は責任者です」と偉そうなこと言っていましたけれども、さてとなると、これはちょっと分からんようになってきましたねえ。株式会社でございませうば、カンパニー・リミテッドですからこれはリミットのことだけやりさえすればそれでいいのでございましょうけれど、われわれの

ところではリミットは無限でございませう。だからどうにもしようがない。

その亡くなった隊員というのは執念の男でございませうので、先程申しましたようにネパールへ連れて行って交渉させたような中心人物でございませう。その男は登れるまでは独身でいると言っていたがなばっておりましてので、妻もなし子もなしで、その点でやや気が楽なように見えますけれども、そんなことで私の責任がのめられるわけではありませう。一体、責任を負うということはどういうことなんだ。本当に私は考えました。けれど、いまだにわかりませう。わずかにまあ、考えついた最初のことは、どうも反省することら

しい、そしていろんな方々からのいろんな批判を受け、その隊員の亡くなったということから得られるあらゆる教訓を学び、そして二度とこんなことが起こらんように、また私の人生にも、他の人たちの人生にもそれが何かの前向きプラスになりますように、まあ難しいことばで言えば、フィードバックいたしますように、私としてはなすべきだと思つて、今もなお思いつづけている次第でございませう。

まあ、こんなようなことが、私が今日までやってまいりました生き方の一部でございませうが……、どうぞ、こういう生き方もあるなあということに聞き流していただければありがたいと思ひます。



「本物 とは何か」

藤本 博

(厚木中央青年の家所長)

お話をお聞きしたところにより
ますと、西堀先生は明治三十六年
のお生まれだそうで、和田先生も
その五年後ぐらいだそうです。私
は大正十二年ですから、みな大先
輩です。それで青年の家におりま
すと、いつも最年長者でございま
すので、でたらめなことを言うわ
けにもいかず、ひじょうに慎重に
やらなければなりません。きよ
うは、私が一番若年ですので、言

いたいことを言ったら後で訂正し
ていただくつもりで、思ったとお
りのことを申し上げたい、という
ふうに思っております。

ただ、そういうつもりで来たん
ですけれど、今、お話を承っており
ますと、だんだんしぼんでまいり
ました。(笑) 西堀先生、ひじょう
に難しいことをさらっとおっしゃ
るんで、私はガッカリしちゃいま
したけど。(笑)

不可能を可能にする。それを非
常識でやっていけばよい。私も実
はそれを考えて、死にものぐるい
でやってきているわけですけど、
中々わかっていただけない。

十五年前に青年の家ができまし
て、私は一年間、遊ばしてもらい
ました。県の役人ですから、給料

は遊んでいてもくれるのですか
ら、一年間、何もいたしませんで
した。そして、あらゆる団体を見
学してきました。何でもいいから
団体と称するものは、どんな処へ
も出かけて行って見せてもらいま
した。二年たってから、これじゃ
いけないんじゃないかなと思って、
今の仕事を始めたわけです。

その頃——私は、人間の出会い
の不思議さというものを感しまし
た——実は和田先生が、私の青年
の家を貸してくれということであ
おいでになったんです。着物の着
流しでこられまして、あの、散歩
に来た、という格好でしたけど。

(笑)「はじめ塾という塾だけど、
一週間ほど貸してくれないのか」
と言っんで、「はじめ塾だかわり

塾だが知らないけれど、ここは塾には貸さない」と玄関先でお断りしたんです。塾だというから、金もうけをしてるのかなあという感じがしてお断りしたのですが、一面、将来、私もやりたいな、なんとも思いました。ただ、その和田先生の帰ってゆく後姿をずっと見てまして、ほんの二言三言のお話の中でしたけれども、私ちよっと感じるものがあり、追っかけてゆくのかなあという気持もあったんですが、そこは役人ですから、営利団体に貸して、後で月給に関係してはと思いやめました。

そして三年目に、和田先生の『葦かびの萌えいずるごとく』の本が出たわけです。たまたま私んところの小使さんが、この本の書評を新

聞でしたか雑誌でしたかで見まして、どうもこの本が面白そうだということ、推せんしてくれまして、さっそく取り寄せたわけです。

今、私どものところに中学生・高校生・大学生のボランティアの人たちが来てますけれども、そういう人たちに読んでもらいたい、勉強してもらおうようになってますが、何か私は、出合いの過ぎ去ったものを感じております。

そして、この本を読んだ時感じたのが、本物って何かな、ということでした。今でもそのことを追求しようと考えているわけです。

「理屈では」と、すぐ皆さんはおっしゃるけれども、理屈ではなしに、経験の中、しかも体験の中からそれを引っ張り出してほしいと

いうようなつもりで、今、青年の家をやっています。

たとえば、私のところ（神奈川県青年の家）に入ってく団体を見ておきますと、ひじょうに規則というものにはばられた生活、べし・べからずの生活ばかりやってるな、と感じます。

「私のところでは、いっさいのべし・べからずはないんだ」と言つと、動けない。決めてもらわないと動けないんですね。

私がよく話す話なんですけれども「おかしいじゃないの。皆さんの卒業した学校にはべし・べからず、べっかりじゃないの。たとえば廊下を走らない」と書いてないところはほとんどないじゃない。火事の時、廊下を走らなきゃ

ウソでしょ。走らなきゃ焼けちゃうじゃない。(笑) この場合、走らなきゃだめでしょ。だけど、授業をしている間に、廊下をカタカタ走られたら困るでしょ。その走るか走らないかを考えるのは自分ですよ。自分で考えて自分で定めるんじゃないか」

ところが、神奈川県和学校というのは、校長さんや先生が決めちゃって、それを守らないとぶんなくる……とそんなふうになっておりまして、何かそこにおかしいところがあるんじゃないか。もっ一回、ここで考えてほしいと思います。

西堀先生は非常識という言葉を使われましたけれど、先生のお話聞いてみて、すごい判断力だな、と感じました。淡々とお話になり

したけれど、その間に頭をクルクル回さなきゃわからなくなるような、判断力そして決断が大切なんだな、ということを感じとらせていただきました。

また、先生、ずいぶん孤独の中に入っていくんだな、ということを私感しましたけれど、私も非常に大勢の青少年といっしょに生活しております。その中でいつも、自分自身が孤独だな、と思いふりかえった時、自分一人しかない淋しさを感じています。

それに対して先生は「自分自身を叱りとばす」とおっしゃる。自分自身叱りとばすくらいいけない、と思いますけど、なかなかそれができない。その弱さというものを私自身感じますので、そういうこ

とから今の人達が、ひじょうに既成概念にとらわれているな、というところを感じます。

どうしてあんなに決めちゃうのか。たとえば、食事は一日三度とる、と、どこにも書いてないじゃない。なのにみんな三回食べる。「私のところはやらないよ」って言うと、変な顔される。(笑)

夜寝る時には布団ひくでしょ、決まってるみたいなことですね。馬なんか、布団ひかないで立って寝てる、どうもそれはよくわからないらしい。なんかそういう、もう決められているんだ、というようなことについては、私のところでは突放しています。自分で考え、そして、いいと思ったらおやりなさい、悪いと思ったらおやめなさい

い、それだけです。私のところの規則はそれだけです。ただし、きようは中学生が多いから、高校だから、ということでごわりますけど。

中学生の時なんかは、規則はいけど、一つだけことわらしてもらう。

三日間いっしょに生活していくけれど、ぜったい「いいですか」という言葉は使わないで下さい。たとえば、

「テレビ見ていいですか」

「ステレオ聞いていいですか」

そっ言われても、私どもは、

「知らないよ」

と言いますから、

「つめてえなあ」なんて言わないで下さい。(笑)これが我々の、あ

なた方に対する最大の愛情なんだよ、と言います。

そうしますと、休憩時間なんか中学生が事務室に入ってきます。そして、私の顔見て、

「おじさん、『テレビ見ていいですか』って言っちゃいけないんだよね」って。(笑)

「そっだよ」

って言うどじつと立ってますからね。

「あんた何してるの」

って言うと、

「だってテレビ見たいんだもん」

って。(笑)

「見たけりや見ればいいでしょ」

「いいんですか……ああ、いけないんだねえ」(笑)

高校生になるともっとひどい。

私が一通り話をしておきます。す

ると、事務所にカツカツと入ってくる。そして、人の引出しをガラツと開けるんですよ。そしてハサミをちよつと掴んで持っていて「ドロボー!」

すると、

「この所長は冗談がすぎる」

「言っていいことと悪いことがある。人をつかまえてドロボーとは、あまりにも人権蹂躪だ」

「まあ、冗談だから許せるけど」

と。

「私は冗談なんか言ったことはない」

「だって今、私のことドロボーって言ったじゃない」

「確かにあんたにドロボーと言っ

た。他人の引出しを開けて黙ってハサミを持っていたら、ドロボ

ーじゃない」

「だって、所長が開催式の日に、いいですか、って言うなって言ったからいいと思って持ってた」って。そこで、私は「主体性とは何か」ということを考えさせられました。主体性と身勝手との区別がわからないようになり、ダーが、あまりにも神奈川県に多いということを感じます。

なにかというと「政府がこう申してます」「うちのメンバーがこう申してます」と、何かとバックを意識している。主体性というのは、お互いもっている。私だって主体性をもっている。あなただけが主体性をもってるんじゃない。もう少し「本物というのは何か」を考えてほしい、と思うのです。

私は、きょうここまでまいりましたけれど、残念ながら本厚木の駅には新幹線が通っておりません。小田原は止まりますけれど。けさは早かったですから、早く出なければならぬ。できれば新幹線で行きたいと思った。鉄道に電話をかけて、本厚木に新幹線をまわせと言ってもそれはムリだ。私は主体的に行くんだから、と言っても行かれやしない。あれは鉄道の主体性でつくったものだから。

新幹線に乗って遠出をします。ビュッフェで昼めしを食うか、駅弁を買うか、それは私の主体性です。だけでも、ビュッフェで食べると決まった時に、あのメニューにあるもの以外に食べられない。これ気に入くない。私はこんな高

いもの食べたことない、お茶漬けにしてくれ、と言っても、やってくれないわけですね。あのビュッフェの主体性とぶつかる。その時、私の主体性ともぶつかり合いがあるわけです。どうしてもゆずれないのなら、私は空腹をがまんして、ビュッフェを出てくればいいんです。どうしても食べなければならぬ。いんなら、ビュッフェとの妥協があるだろう。それが主体性であり自主性であろう、そういう基本的なところから、我々は考えていかなければならないところにきているような、そんな気がするわけです。

もう少し、お話をしようと思います。ただけれど、西堀先生があまりにいいことをおっしゃるんで、私

はそばで「そうだ、そうだ」というばかりです。

実はこのお話がありました時に、柏樹社の方から、西堀先生のご著書をおくっていただきました、それを読みました。先程お話のありました『石橋をたたけば渡れない』という本を読みました。すぐ柏樹社のほうに電話をかけまして、

「実は、西堀先生の書いてあることに何も異論がない。対談しろと言われてもそばで、そうだそうだ、まったくだ、じゃだめじゃないか、出る価値はありません」

とお断りしました。でも、このお三人と決めたから、都合が悪いから坐っていればいい、と。(笑) そういうわけで、きょうここにきたわけでございます。

倅がひじょうに心配しまして、もう一冊本を買ってきて、「これ読め」と。それが、越冬隊長として南極大陸で越冬された時の記録でございます。それを読みますと、隊長の苦しみというものが、私には、ひじょうにわかるような気がいたしました。

最後に、先生は「責任」ということがいまだにわからない」七十二歳におなりになる方が「わからないんだ」と。

私も実は、県としよっちゅう渡りあいます。そして、最後は「責任はおれが取りゃいいんだ」と言うんですけれども、どうとっていいんだか実は私もわからない。

先生もわからないというんで、ようやく安心しました。(笑)

ますます、責任をとってゆこうかというふうに感じております。

毎年、元旦に若い者を集めまして、明神岳に登っておりますが、明神岳は箱根の外輪山の一つです。今年は登りしただけで、来年からはよそと、本当は心ひそかに思っていました。というのは今年の元旦、山から降りてきて、青年の家の若い職員からひやかされました。

「所長は山登りをすると、平らなところを歩いていても、よいしょ、よいしょと歩いている。平らなところは黙って歩いた方がいいんじゃないですか」(笑)

こんな批評をうけまして、来年からよそうと思ったのであります。でも先生がこの高齢で、ヤルンカ

ンに登られたことを伺って、私も先生のご年齢までは続けようと思いい直したのであります。同時に、私自身、もう少し真剣に生きていかなきゃいけないんじゃないか、ということを感じさせていただきました。

時間がもうあまりございませんので、ひじょうに幸いだというふうに思っております。(笑)



『責任』 ということ

和田 重正

(はじめ塾)

いよいよおはちが廻ってまいりましたが、先程、西堀先生がおっしゃったように、酸素が欠乏すると頭がボーツとしてくるそうです。私はこのところ甚だしく酸素が欠乏していて、お話をうかがっている間は、「そうだ、そうだ……」とうなずいているのですけれど、もう十分もすぎると、それも忘れてしまっ、はてな、おはちが廻ってきたら、何を話そうかなと思

って、大へんまごついているんです。

先程、藤本先生が『石橋をたたけば渡れない』という西堀先生のご本を読んで「そうだ、そうだ」と思うことばかりだったとおっしゃいましたが、私は「そうだ、そうだ」なんていうどころでなく、「やられた、やられた」とばかりで、どうにもしようがないな、頭が上がらないな、こういう方と並んでお話なんかさせられたんじゃないかな、と思ってしまう。

——本当に西堀先生のお話をうかがっていると、最初から最後まで、感想だらけなので、どこから、どういうふうに自分の感じたことをお話したらよいか、わからないくらいです。

それでも、まあ、欲ばってもし

ようがありませんから、順序もなしに、まず「責任」ということについてお話してみます。

私は、中学生を相手の塾をやっています。塾といっても盛大な塾ではなく、はじめ塾だか、おわり塾だが、おわり塾に近いんですが……。

ここで私は、一つの事柄として、子どもたちに、「思いつき」のことをさせてみたてようがないのです。「思いつき」というのがどういうことなのかは、自分でもよく分からないのですが、強いて言えば、なにか野性のようなものを取りもどさせてやりたい。文化的だとか文明的だとか、よく知りませんが、人間が、人間のつくっ

た人間の世界にだけ生きていると人間でなくなってしまう、今の子どもたちを見てみると、そういう感じがするのです。

そこで、子どもたちが——私のところに来ているのは主として中学生ですが、人間らしいものに戻ってゆく、そういう機会を与えないな、思いつきりのことをさせてやりたいなど強く思うのです。

私が、なぜこんなことを思うようになったのか、もつとさかのぼって考えてみると、よく分かりませんが、多分、自分の高等学校時代（旧制）の経験からではないかと思うのです。当時は全寮生でした、寮に入りますと、もつ、無茶苦茶なこと、非常識なことをやりました。その非常識ぶりは、その

当時でも、ずいぶん批難がありましたけれど、その無茶苦茶なこと、非常識なことが、そろばん勘定以外の何か、この「いのち」を生き生きさせてくれたような気がするんです。

ところが戦後は、そのようなものが、だんだん失われてきている、中学生なんか見えていますと、だんだんとちこちまってきた、のびのびとした人間らしさというものをなくしてしまっている、これは可愛想なことだ——これは終戦直後のことで、今日のような、勉強、勉強……といった時代ではないんですが、何か、そんなふうに感じました。

それで、子どもたちに、思いつきりのことがやれる場所をつくっ

てやりたい、と思って、その頃、小田原の山のほうにあった東泉院というお寺を貸してもらって合宿をし、かなり無茶なことをさせてもらいました。

しかし、だんだんやってみると、中学生たちのことですから、もうそこら中で迷惑をかけている、何とかして、本当に思いつきりのことができる、人里離れたところに連れていけないかなあ……と、思っているうちに、現在の丹沢の山中にある一心寮という合宿所を与えられたのです。それこそ、ここでは、どんなに大きな声を出しても、他の人には聞こえないといった山中です。

ここで何をするのかと申しますと、まず、規則がないわけです。

どうしなきゃならないというのは何にもない。何にもないというのは、大体、私に規則をつくる能力がないし、ヘタなものをつくるんなら作らないほうがよいと思っっているんです。ただ、人間のつくったものからなるべく遠ざかるように、というのが趣旨なものですから、ラジオだとかテレビだとか新聞だとか、そういうものは持ちこまない。もう一つは、ここでお酒をのんじゃいけない。ということだけです。

西堀先生のご本など拝見すると、南極に出動すると、みなさん適当にお飲みになられているらしいので、やっぱり、お酒を飲んだほうがいいのかなあと反省しているんです。が今のところ、この規則を撤回し

ようとは思わないんです。もっとも、中学生ですから……（笑い）。酒を飲んではいけない、テレビやラジオをもちこまない。それから、うるさい楽器、ジャカジャカジャンジャンなんていうのはいけない、まあ、そのくらいで、あとは任せている。

そうしますと、青少年たちというのは、実に乱暴なことが好きなんです。まず必ず、木登りをする――女の子でも平気で木登りをします。木登りというのは、人間の何か、祖先はサルだったというから、そういう性質が残ってるんでしょう。それに回りに、こんな太くて高い木がいっぱいあるんですからね、登りたくなるのは自然です。

あの木登りというのは、落っこちてケガしないという保証はどこにもない。実際、子どもたちがパールと登って、しかも、大きな木の枝から枝へ、ターザンごっこみたいなのをやって、ずっと向こうまで渡ってゆく、そんなことをやっているのを見たら、こりゃ大変だ、と思いますね。

それから、一心寮では、ラグビーマットなんていうものすごい、メチャクチャな、ルールもないラグビーのようなものを発明してやっています。それをやらないと一心寮に来た感じがしないらしく、もう必ずやります。見えますと、どんな大ケガをするかと思うようなことをやっています。

私は、"やれ"とも言いません

んが、やりたいものにはやらせておく、いろんな危険をおかしても、やるだけの価値があると思っていますのです。しかし、そうして七年間、やっていますけれど、一度も大きな事故をおこしたことがありません。まあ、多分、大丈夫なんだろうと思っていますが、もし、事故がおきたらどうするか、大ていの人は心配してくれれます。

その他、この辺にはマムシがいいます。何時かも、NHKのテレビが取材に来られた時、ちょうど、そのマムシが出てきて捕えたところを放映して下さったんですが、たくさんはいないけど、時々出てくる。これなんかも、今までそういうことはないけど、もし噛まれたら、それこそ大へんです。

一心寮では、この他、いろんな危険なことがたくさんある。じゃあ、どうするか……。勿論、万一の時にはこうしようという腹づもりはありますけれど、しかし、その時には、大へんな批難が起るにちがいありません。なにしろ、乱暴ざかりの中学生たちのことから、やりすぎること、困ったことが起こらない保証はないのです。で、もしものことが起こったら、どうだろうと常識的には心配なことはばかりです。しかし、私は、万一の時には、全責任を私が負おうと思っています。

そもそも、こういうことを始めた発端というのは、世の中の人間の常識的な、面倒くさい、気ばっかしつかっていないやらならない

生活——大きな声を出したら隣りの家から文句が出たり、廊下を走ったら先生からどなられる……と言った、小っちゃなことに氣ばかりしつかつていなければならぬ生活をしている子どもたちと世間との間に立って、子どもたちの防壁になってやろうと思って、始めたことなんです。

それが自分にやれるかどうか分からなければ、なってやるつもりでいます。ですから、子どもたちのことは、全部自分が全責任を負ってやる、と思うっているわけです。そう思って、ずいぶん長い間、そんなような危ないことや困ったことが起こりそうな生活を、子どもたちと一緒にやってきましたわけです。

それで今、責任をとるとは何なのか、と言うことを、西堀先生から聞かれて、こりゃ困つたな——、と思っていましたら、また藤本先生も私と同じなので、これは少し助かったような氣がしますが、とにかく、私は、できるだけ事故や災害に対しての処置や方法をこうする、それから、世間一般の批難を逃げないで受けとめてゆこう、まあ、こんなふうな氣持でやってきているわけです。

西堀先生のお話から、この他、いろいろなことを教えられました。が、人間が生きてゆくということは何なのか、先生はどうお考えになっているのだらうと思っていまして、「経験をつんでゆく」とい

う言葉で表現されて、まったくこういう言葉でいうと、本当にピンとくるんだなと思って聞かしていただいたんです。

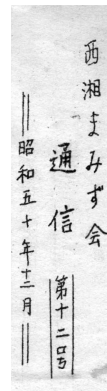
と言うのは、実は、私は、ごく最近、新学説を考えつきまして、新学説というのには、これまでの宗教的な説明でない、人間とか生命とかをどう考えるかということなんです。なにしろ宇宙の始まりから、単細胞生物ができ、多細胞生物が生じ、それから何億年かの時間をかけて高等動物を生じ、遂に、今日の知能をもった人類にまで発達、進化してくる中で、人間をどう考えるかという話ですから、要約するだけでも三時間はかかってしまいます。

それで、ヒントだけ申し上げる

と、——生物が個体としての経験を獲得するということであれば、個体が死んでしまえば、その経験は何も意味がないし、進化ということは考えられないと思うのです。新しい経験を積み重ねることは、もっと大きな意味がある、個体というか、個的生命というか、それは単細胞生物以来の経験的知恵を内包していると考ええるのです。

そんな意味で、西堀先生の「経験をつんでゆく」という言葉を大へん興味がお聞きしたのです。

もう時間がなくて、中途半ばな話になってしましまして申しわけありませんけれども、一応、このくらいにおきます。



視野を広げる

ものごとの判断をよくするためには視野を広げなければなりません。この前の戦争のとき、ノモンハンで敵が退却するので喜んで追っているうちに敵の包囲網の中に入り全滅した日本の大部隊があったという話を先日読みましたが、これは司令官の視野が目前の敵部隊に限られて広い範囲の様子を見ることができなかったために起こった悲劇でしょう。

われわれの日常生活の中でもそういうことがいくつもあります。

うまい儲け話につられてマンマと詐欺にひっかかる人がたくさんいます。若い女の子の中にはテレビに出してやると言われて体も芯も犠牲にしてしまうものがあるそうです。一流大学に入るために小学生の頃から何もかも顧みずに点取り勉強にばかり励んでいるうちに人づき合いの何たるかを弁えない精神的かたわらになってしまいう青年も数え切れないほどあります。地位を追って二十年、定年退職したとき淋しさと虚しさに身の置き場のなくなるサラリーマン、同様に子どもを唯一の生き甲斐とする母親が、子どもに期待を裏切られたり、子どもが一人前になって母親の手の届かぬ別家庭の人になってしまったりしたとき、はたの目

にも気の毒なほどあわてたり、嘆いたりする事も珍しくありません。

ともかく、何かをアテにして夢中になってそれを追いかけていると、フト我にかえったときに、もう取り返しをつかないところへはまり込んでしまっていることがあります。

これは当面の敵を追いかけることに夢中になって伏兵のあることを忘れていた司令官のようなものです。

われわれは敵の包囲下に陥らないためにはいつもっと広い視野をもたねばなりません。それには遠目がきくことも必要ですが、それよりもっと、大事なことは視角を拡げることです。

では人生に於いて視角を拡げる

とはどういうことでしょう。

それは政治経済法律歴史地理科学——科学の中でも何十とも知れぬ分野に分かれています。それから文芸美術栄養料理農業天文氣象哲学宗教スポーツ趣味その他、とても挙げきれませんが、そのような人間の知的営みの各分野の知識を広く網羅することだと思ふ人があるかもしれません。それはとんだ間違いです。そういう知識はいくら豊富になっても人生が戦場で敵の包囲に陥るのを防ぐことには役立ちません。

役に立つのは自分の心の中の分野——つまり欲望の種類を広く見渡すことです。

ある欲望例えば金銭欲とか情欲に夢中になってそれを追いかけて

いると、それ以外の、例えば隣人から親しまれ尊敬されたいという欲望や平和でありたい、健康でありたいというような欲望を犠牲にすることになります。それで折角金銭欲や情欲を満足させても、気がついてみたら他人からは恨まれ、軽蔑され、挙げ句の果てには健康も損なうという全面敗北の憂き目を見なければならぬことになります。

人間の欲望というものは、どんな高級に見える欲望でもそれだけに心を奪われて夢中になっていると必ず敗北（行き詰まり）に至ります。そうなるように人間はできているのです。

しかし欲望を満たそうと熱心に努力することがわるいわけではあ

りません。いや、熱心でなければならぬのです。いい加減の中途半端な求め方では折角の欲望の本当の味わいを知ることができないからです。

それではどうしたらよいかと言うと、自分の中のいろいろな欲望を冷静に観て、それらの欲望の間のバランスに支障を来さないかどうかを自ら測ってみることです。

こういうと、大変むずかしいことを要求しているようですが、実際そのつもりでやってみれば簡単なことです。はやく言えば、「自分」をほっぽらかして特定の欲に目がくらんではいしないかと落ちついて「自分」の中をよく見直してみる、ということです。これをやらないで一つの欲望にはまり込ん

でいるとしまいで必ずバカをみることになるということです。

だからわれわれがバカらしくない人生を送ろうと思ったら、時々

——一日に一ぺん、せめて一週間——に一度でいいから、じっと自分の中を見直してみる必要があると思うのです。

だが自分で自分を見るなどということができるだろうか、と思われるかもしれませんが、それは簡単なことです。自分の欲望群の有様を一段高いところから眺めれば欲望群全域を見渡すことができるわけです。

人生についての味わい方の深さを挙げるができると思います。
戦後三十年間の変化は我々昔の青年をして長嘆息せしめるに足るも

のがあります。老人を嘆かせるくらいは問題ではありませんが、人生についても少し深い理解を持たなければ、この人たちはただの空しい泣き笑いの一生を過ごすことになるだろうと思って、余計なお節介ながら、黙って見ていられない気がするのです。

人生の味わい、と言っても「人生とは何ぞや」とか「人間如何に生くべきや」などと大上段に振りかぶったような問題を初めから考えよう、というのではないのです。いずれ行く行くはそのような大づかみな、いわゆる人生観の問題に達するでしょうが、いま差し当たりはそのような概括的なことでなく、われわれが生きていく上で遭遇する問題の一つ一つについても

う少し深く考える習慣をつけてもらいたいと思うのです。ところがいまの青少年の生活には、そのような問題について深く考え、味わう構会が与えられていないのではありませんか。何かよいキッカケを与えなければ彼らは空しく青少年時代を経過して、悪くすれば生涯を目先の利害得失に振り回されて、スルメの表面についた塩をなめたような生涯を送ってしまうかもしれません。

自分の過去をくり返ってみると、小学生の時にすでに大きな疑問をもっていたようです。例えば「どうして大人は自分勝手になんでもできるのに、子どもは許されないのだろう」とか「どうしてウソを ついてはいけないのだろう。ウソ

をつく方がトクになることがある。いけなくてもトクになる方がトクだから……」など考えていたようです。しかしそれは極めて漠然としたもので、考えたというより、気がしていた、という方が正しいかも知れません。

ところが中学生になると心に浮かんてくる疑問はもっとハッキリとした形をとり、内容も堂々たる人生問題でした。中学一、二、三年の間に私の心に強く浮かんできた問題は結局自分の一生の課題となりました。例えば「この時に、この国に生まれ、この親の子となり、この兄妹の弟となっているこの自分はどこから来たのだろう。何によってこういうことになっているのだろう」とか、「大人が教え

てくれる道徳は守る方が得なのか。守らない方が自分には得になるのではないか」それから最大の疑問は、^{セックス}性 についてです。性の何が問題なのかは自分にもわからないが、ともかく、性に関することは何から何まで強い興味と不安の種ならざるはなし、という状態でした。また「死んだらどうなるのだろう」ということも心のどこかでいつも問題になっていました。その他数え上げたらキリがないほどの疑問をもっていました。

それらの問題はかなりハッキリした形で意識していましたが、少年の私には、「これは子どもっぽい幼稚な疑問で大人にはわかり切ったことなのだろう」と思われたので、なるべくその疑問を避けて通

ろうとしたものでした。

この自分の経験を顧み、そして今の少年たちを見ると、彼等もやはり同じような問題を心のどこかに感じているに違いないと思われるのです。それを彼等もやはり「子どものクダナイ疑問だと思って見て見ぬふりをして通っているのだと思います。ただ我々の少年時代はベンキョウや点数などという怪物が今ほど猛威を奮っていなかったので心の底に湧いてきたそれらの問題を眺める精神的余裕がありました。しかし今日の少年たちにはありません。これは人間の子にとっては決定的な不幸です。

“自分を知る”という人間最大の特徴を放棄したことになるからです。

それはともかく、子どもも中学生ぐらいになると人生の最も根本的なところにつながる奥深い問題になんとなく気づくのが普通のようです。それをそれぞれの性格と環境の差異によって、全く気にとめずに流し去ってしまったら、あるいはしばらくそれを眺め味わったりすることになるのだと思います。今日の子どもたちの置かれている環境は前者を作るのに最も適したもののようによわれれます。つまり折角浮かんできた味わい深い問題から目をそらして浅はかな目の前の出来事に目も心も奪われすぎて行く、その結果はいつも不安とあせりに追われ我に帰ったとき底知れぬ虚しさに陥る、ということになりやすい環境だと思つのです。

そこで我々親や教師は、子どもたちに虚しくない人生を送らせるためにどうしてやったらよいかということが問題になります。これは、どんな方法で尻をひっぱたいてやったら勉強するようにするか、という問題より遙かに重大な教育問題です。

「人生について考えなさいよ」などと言ってみてもはじまりません。私はやはり我々自身がこのことの重大性を理解し、子どもたちが感じていであろう問題について日常会話の中で触れていくのがよいのだと思います。こうした奥深い人生の問題は大人といえども徹底解決を得ているものではありません。もしかすると理解の程度は子どもとあまり違わないかもしれま

せん。ですから我々が子どもに教えるということはできません。こうではないか、ああではないかと話し合うことができるだけだとも思います。そして、それでよいのだと思います。

それから、このような心の奥深くから生じてくる疑問は、数学の問題を解くように筋道を立てて解決に至るといふ性質のことではありませんから、これに執拗^{しつこ}く取りついては必要はないということをよく心得ておくことは大切です。問題を捨てないように心のどこかにしまつて、宿題として温めていればそのうち熟して解決の芽が出てくるものだということをよく知っておかねばならないと思うのです。

私はこのようなことを考えて、いつも塾の子たちに、人生を考える手がかりになるような問題を出しています。今月の「天のはた」もその一つで、人間（自分）の価値ということについて広く深く考えてもらおうと思つて掲げたのです。「スマイレとタンポポどどちらの方が値打ちがあるかを考えてみよう」（天のはた七）というのです。小学校高学年以上のお子さんをお持ちのお父さんやお母さんがこの問題についてお子さんと話し合つてみてくださつたら、その中からいろいろなきことがわかつてきて面白いと思います。

和田重正

ある日の一瞬

和田先生が描いた
上の畑からのスケッチ



後 記

この号の編集で『まみず』百号の記念講演を久しぶりに読み直しました。ご存じの方もいられると思いますが、西堀栄三郎さんは、南極のオングル島に初めて日本の観測基地（昭和基地とく号色）を建設したおひとりです。

観測船「宗谷」が氷の海を脱出でき、ギリギリまでの二週間で建て上げた数個の粗末な建物が、日本初の南極越冬観測の基地となり、約十名の隊員が残って越冬することとなりました。西堀さんはその十余名の命を預かる越冬隊長になりました。

余談ながらそそくさとオングル島近くを離れた「宗谷」でしたが、

（氷のため元々オングル島までは辿り着けなかった）数日後、海の氷に遮られ動けなくなっていました。それを助けに来てくれたのがソ連の砕氷船オビ号でした。その時の経緯や、のちの昭和基地の越冬の様子をラジオやテレビで聞いていたのを思い出します。

（岩波新書に『南極越冬記』）

越冬観測からのちに、上高地で若者たちと話をする西堀さんを観る機会があり、わたしは西堀さんの人柄や生き様に益々興味を持つようになりました。積極的なその生き方は観測や登山に限らず様々な方面で観られました。

平澤 正義

和田重正に学ぶ会機関誌『ここに帰る』 第88号

令和8年1月1日 発行

発行者 〒399-3701 長野県上伊那郡飯島町田切1295
和田重正に学ぶ会 平澤 正義

和田重正に学ぶ会ホームページ <http://wadashigemasa.com/>

和田重正に学ぶ会 会費は 年二千円 『ここに帰る』バックナンバー お分かります (有 料)

◇◇ 当会活動資金へのご寄付 大歓迎 ◇◇